



戦前日本の愛国・戦意高揚と表象としての日の丸： 軍歌の分析を手掛かりにして

大畑, 正弘

(Citation)

六甲台論集. 国際協力研究編, 23:1-7

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/0100486395>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486395>



戦前日本の愛国・戦意高揚と表象としての日の丸

—軍歌の分析を手掛かりにして—

大畑 正弘

はじめに

かつて、日本の軍国主義の象徴として様々な批判にさらされることの多かった国旗日の丸¹だが、戦前期の日本において、いつから国民の愛国心を高め戦意を高揚するための表象の1つとして積極的に使われだしたのだろうか。本稿では、軍歌に登場する日の丸の量的変化についての分析を手掛かりにして、その点について考察してみたいと考える。

ところで、なぜそのような分析方法が有効だと言えるのか。それは、そもそも軍歌とは、平凡社『音楽大事典』によると、「戦意高揚・愛国精神の鼓舞を目的として軍事を歌った歌詞をもつ歌」²のことだとされている。したがって、軍歌に歌いこまれる日の丸の数が増える(=日の丸を歌いこんだ軍歌の数が増える)ということは、日の丸が国民の愛国心を高め戦意を高揚するための表象の1つとして積極的に使用されるという事と大きな相関関係を持つと考えられるからである。

以下、[1]では、まずは、軍歌に登場する日の丸の分析方法についての確認を行なう。

[1]の(1)で分析対象とする軍歌の範囲をどのように設定するのかについて述べると共に、(2)でそのデータをどう処理するかについて説明する。

その上で[2]では、[1]の作業を通して得られた表である「【資料3】日の丸が歌いこまれた軍歌一覧」を読み込み、上記の課題についての考察を行なう。そして、「おわりに」で上記の問い、即ち、日の丸は、「戦前期の日本において、いつから国民の愛国心を高め戦意を高揚するための表象の1つとして積極的に使われだしたのだろうか」という問いに答え

(注)

¹ 繁下和雄監修『新聞集成 日の丸・君が代』大空社、1989年を参照のこと。本書の表紙には、書誌情報以外に「わが国の国旗と国歌の意義の理解を深め、昭和の『日の丸・君が代』論争を検証する第一級資料集!」という記述がある。その他、田中伸尚『日の丸・君が代の戦後史』岩波書店(岩波新書)、2000年を参照のこと。

² 下中邦彦執筆、岸辺成雄編『音楽大事典 第2巻』平凡社、1982年、836頁。ちなみにこの事典は、平凡社の自評によると、「音楽学の研究成果と音楽界の動向を総合する日本唯一の本格派音楽事典。いわゆる西洋音楽偏重に陥ることなく、日本と東西世界の古今の音楽を総合するとともに、芸術音楽、民俗音楽、大衆音楽の全分野にわたって、人名、曲種、理論、用語、楽器、演奏など万般を詳述し、さらに関連諸科学や応用分野にまでおよぶ。収録項目数6,800、それぞれ大・中・小項目に体系化し、多数の本文図版をそえる。総索引付き」(下線部は引用者)となっている。特に、下線部分の「音楽学の研究成果と音楽界の動向を総合する日本唯一の本格派音楽事典」という点については広く認められているところである。(引用部分は、平凡社のサイトより <https://www.heibonsha.co.jp/book/b157347.html> 2023.2.14 最終閲覧。)



図1. 堀内敏三『定本 日本の軍歌』の箱表面。筆者撮影。



図2. 長田暁二『日本軍歌全集』の箱表面。筆者撮影。

て本稿を終えたいと考える。

[1] 軍歌に登場する日の丸の分析方法

(1) 分析対象とする軍歌の絞り込み

では、軍歌に登場する日の丸の量的分析という課題を具体的にどのような形で進めていくのかという点について述べていこう。『世界軍歌全集』や『日本の軍歌—国民的音楽の歴史』などの著書を持ち軍歌研究者として著名な辻田真佐憲によると、日本で「初めての軍歌『来れや来れ』が登場した一八八五年から終戦の一九四五年までに作られた曲は一万超³」ということである。ただそれは、各部隊の歌などマイナーなものもすべて集めるとそうなるという事であり、国民全体の愛国心を高め戦意を高揚するためにある程度人口に膾炙した軍歌となると事情は変わってくる。

ではそれをどう確定すれば良いのか。ここでは試論的に、堀内敬三『定本 日本の軍歌』⁴と長田暁二『日本軍歌全集』⁵の目次部分で取り上げられた軍歌を合わせたものをそれに合致するもの、即ち、データの母集団として分析を進めたいと考える。なぜ、これら2冊の本の軍歌楽曲の選択に依拠するのか。

堀内敬三についていえば、以下の【資料1】に示すように、彼は、日本の近代音楽の発展と共に歩んできたこの分野の草分け的存在であり、軍歌を含む日本近代音楽研究の自他ともに認める第一人者である。その人物が「定本」と位置づけ、かつ「日本軍歌史研究の決定版⁶」と言われるものであるならば、その軍歌楽曲の選択も、本研究の分析の基礎とするに足ると考えた。

また、長田暁二についていえば、第1には、以下の【資料2】に見られるように、彼が「日本の歌の歴史」の研究については権威者⁷であることであり、第2には、彼の『日本軍歌全集』が、類書の中では収録曲数が最も多い部類に属し、第3には、同書が、それぞれの楽曲が世に出された年月日を可能な限り厳密に特定・記述しようとしているからである。特にこの第3の点は、類書に見られない特徴であり、本稿のためになくはならないデータと言えるのである。

そして、この軍歌研究における二大巨頭の楽曲選択眼に依拠して分析データの母集団を構成するというのは、他にこれ以上の適当な方法がすぐには見当たらないということも含めて、一定の妥当性を持つと言いうるのではないかと考えたのである。

【資料1】

堀内 敬三 [ほりうち けいぞう] 1897 (明治30)・12・6～1983 (昭和58)・10・12

音楽評論家。東京生れ。田村虎蔵、大沼哲に師事。ミシガン大学工科、マサチューセッツ工科大学院卒。日本放送協会音楽部長、松竹映画音楽部長、日本大学教授、音楽之友社会長。長く音楽評論および洋楽の啓蒙につくす。外国歌曲の訳詞はおびただしい数にのぼる。主要著書に『音楽史』(昭22 音楽の友社)『音楽五十年史』(昭17 鱒書房)『ベートーベン交響曲解説』(昭22 音楽の友社)『音楽の泉』(昭28 音楽の友社)『日本の軍歌』(昭44 実業之日本社)『日本の唱

³ 辻田真佐憲『日本の軍歌—国民的音楽の歴史』幻冬舎(幻冬舎新書)、2014年の裏表紙上での記載による。

⁴ 堀内敬三『定本 日本の軍歌』実業之日本社、1969年。この本は、329頁あり、目次部分には147曲がリストアップされている。また、帯には「ついに完成!! 日本軍歌史研究の決定版!!」「日本軍歌を、子々孫々に正しく伝える定本の完成」と銘打たれている。

⁵ 長田暁二『日本軍歌全集』音楽之友社、1976年。この本は、523頁あり、目次部分に358曲の軍歌を収録している。

⁶ 堀内敬三『定本 日本の軍歌』実業之日本社、1969年の帯の文言より。

歌』(昭45 実業之日本社)など多数。(井上武士 1984 記)
出所:『JapanKnowledge Lib』所載『日本近代文学大事典』の「堀内敬三」の項目より。
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=522101000004171> 2023.2.14 最終閲覧。

【資料2】

長田 暁二 [おさだ ぎょうじ]
音楽文化研究家。昭和5年3月19日岡山県笠岡市生まれ。昭和28年駒沢大学英米文学科卒。大学卒業後、キングレコード入社、童謡担当ディレクターを振り出しに30年間に亘ってディレクター一筋道。ポリドール学芸部長、徳間音楽工業株式会社常務取締役を経て、57年10月、明治音楽企画を設立して代表取締役に、現在に至る。…(中略)…歌謡、民謡、軍歌、懐メロ、歌謡曲、日本語による外国の歌、オペラとその幅は極めて広い。特に“日本の歌の歴史”の研究については権威者で、メディアの発達と歌の変化についての研究では第一人者的存在である。
出所:「長田暁二プロフィール」、長田暁二『戦争が遺した歌—歌が明かす戦争の背景』全音楽譜出版社、2015年、奥付より。(中略)は引用者。

(2) 処理方法

では次に、堀内敬三と長田暁二の両書の目次にあげられている全楽曲からなる分析の母集団をどのように処理したのかということについて説明していこう。

具体的には、以下の(ア)～(オ)の手順で処理を行なった。

(ア) 堀内本収録の全軍歌147曲と長田本収録の全軍歌358曲の楽曲名をエクセルの表に打ち込む。

その際、両書に重複しているものは1曲と数えた。また、成立年代が特定できないものや全歌詞がどうしても確認できなかったもの⁷、1946年以降のものは対象楽曲から外した。結果として、366曲の軍歌が分析の対象として残ることになった。

(イ) 上記(ア)の366楽曲について、楽曲名もしくは歌詞の中に「日の丸」「日章旗」「日の御旗」などと、日の丸が歌い込まれているものをエクセルの表上にチェックしていった。逆に「朝日の御旗」等、旭日旗と考えられるものはすべて外した。また、「旗」とあっても、明確に日の丸と特定できないものも、日の丸の数には入れなかった。

(ウ) 本稿で分析対象とする全軍歌(366曲)のエクセルの表を、軍歌の成立年代順に並べ替えた。

なおその際、楽曲の成立の月が特定できているものについては、【資料3】の「成立年・月」の欄に斜体で数字を入れた。また、成立月が特定できていないものについては、空欄とし、楽曲を各年の最後部分に配置した。

⁷ 堀内敬三『定本 日本の軍歌』の中には、記述にあたり歌詞の一部分しか掲載されていないものが何曲もあり、それを評論家・近現代史研究者の辻田真佐憲のHP(「西洋軍歌蒐集館・大日本帝国」<http://gunka.sakura.ne.jp/nihon.htm> 2023.2.18 最終閲覧)で確認したり、八巻明彦編『軍歌と戦時歌謡集』(新興楽譜出版社、1972年)や堀内敬三『童謡唱歌名曲全集続編1 明治回顧 軍歌唱歌名曲選』(京文社、1932年)、堀内敬三『日本の軍歌』(日本音楽雑誌株式会社、1944年)、安西茂喜編『日本軍歌大全集』(アンカー興業、1980年)その他で確認に努めたが、現状ではどうしても発見できなかったものが若干曲発生した。

(エ) 上記 (ウ) のエクセルの表を、以下の各時期に区分した。その際、時期区分については、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、日中全面戦争、太平洋戦争と、近代日本に大きな影響を与えた戦争ごとに時期を区分することとした。

- (i) 幕末・明治初期～ (1866-1893)
- (ii) 日清戦争～ (1894-1903)
- (iii) 日露戦争～ (1904-1913)
- (iv) 第一次世界大戦～ (1914-1930)
- (v) 満州事変～ (1931-1936)
- (vi) 日中全面戦争～ (1937-1940)
- (vii) 太平洋戦争～ (1941-1945)

(オ) 上記 (エ) の時期区分の各時期ごとに、以下の (A)、(B)、(C)、(D)、(E) を算出し、右の【資料3】のような形にまとめて、分析・考察を行った。

- (A) 日の丸が歌いこまれた軍歌の、各年ごとの合計数。
- (B) 各年ごとの、その年に作られた軍歌の合計数。
- (C) 日の丸が歌いこまれた軍歌の、各時期区分の期間ごとの合計数。
- (D) 各時期区分の期間ごとの軍歌の合計数。
- (E) (C) ÷ (D) の値をパーセント表示した数値。時期区分の各時期ごとに日の丸を歌いこんだ軍歌が何パーセントあるかということを示すもので、本稿では、この数値を重視した。

時期区分	日の丸が歌いこまれた楽曲名	成立年・月	日の丸・年ごと合計数 (A)	全軍歌・年ごと合計数 (B)	日の丸・期間ごと合計数 (C)	全軍歌・期間ごと合計数 (D)	(C) / (D) 単位 % (E)		
i	近衛軍歌	1886	1	2	2	22	9.1		
	来れや来れ	1888	1	1					
ii	進め矢玉	1894 ⁸	4	12	6	35	17.1		
	黄海の大捷	1894 ⁹							
	成歎駅	1894							
	黄海海戦の歌	1894							
	大寺少将	1895 ⁴						1	10
	我が海軍	1897						1	3
iii	軍神橋中佐	1904	4	10	6	25	24.0		
	日本海軍	1904							
	日本陸軍	1904							
	旅順口の戦	1904							
	水師營の会見	1906 ⁶						2	6
	要塞砲兵の歌 (皇砲兵の歌)	1906							
iv	国旗軍艦旗	1914	1	6	2	24	8.3		
	朝鮮国境守備隊の歌	1929	1	4					
v	満州行進曲	1932 ²	1	11	3	25	12.0		
	連合艦隊行進曲	1933							
	第三艦隊警備の歌	1933	2	3					
vi	進軍の歌	1937 ⁹	15	37	34	121	28.1		
	慰問袋を	1937 ¹⁰							
	露営の歌	1937 ¹⁰							
	山嶺の君が代	1937 ¹¹							
	殊勲	1937 ¹²							
	皇軍大捷の歌	1938 ²							
	戦地から故郷から	1938 ²							
	少国民愛国歌	1938 ³							
	上海派遣軍	1938 ³							
	日軍旗の下に	1938 ⁴							
	髭の兵隊さん	1938 ⁴							
	日の丸行進曲	1938 ⁴							
	北京だより	1938 ⁷							
	手向けの喇叭	1938 ⁸							
	大陸行進曲	1938 ¹¹							
	進軍の一夜	1938 ¹²							
	お馬と兵隊さん	1938							
	工兵の歌	1938							
	上海派遣軍の歌	1938							
	八紘一手	1938							
	vii	父よあなたは強かった						1939 ²	12
愛馬行		1939 ³							
愛馬進軍歌		1939 ³							
暁の決死隊		1939 ³							
胡弓の哀歌		1939 ⁴							
海の勇者		1939 ⁵							
土と兵隊の歌		1939 ⁹							
月下の歩哨線		1939 ¹⁰							
出征兵士を送る歌		1939 ¹⁰							
征空行		1939 ¹⁰							
日の丸子守歌		1939 ¹¹							
騎兵の歌		1939							
空の勇士		1940 ¹	2	26					
月月火水木金金		1940 ¹¹							
viii		仏印だより	1941 ¹	7	26	18	114	15.8	
	産業戦士の歌	1941 ²							
	南進男児の歌	1941 ³							
	ペダル進軍歌	1941 ¹²							
	勇む銀輪	1942 ⁴							
	十億の進軍	1942 ⁴							
	大東亜戦争陸軍の歌	1942 ⁴							
	ボルネオの歌	1942 ⁴							
	マライ攻略戦	1942 ⁵							
	若い力	1942 ⁷							
	戦友の遺骨を抱いて	1942							
	帆網は歌うよ	1943 ³							
シャンラン節	1943 ⁵								
学徒空の進軍	1943 ¹¹	5	23						
加藤隼戦闘隊	1943 ¹²								
大アジア獅子吼の歌	1943 ¹²								
特幹の歌	1944 ²	2	22						
海軍予備練の歌 (大東亜船員の歌)	1944								
各時期の合計 (i + ii + iii + iv + v + vi + vii)			71		71	366	19.4		

出典：堀内敬三『定本 日本の軍歌』、長田暁二『日本軍歌全集』等から著者が作成。

[2] 軍歌に登場する日の丸の分析・考察

では右の【資料3】の表から何が言えるのか。以下、5点にわたって分析・考察を加えてみた。

(ア) まず最初に強調したいのは、日の丸を歌いこんだ軍歌の、(vi) 日中全面戦争～(1937-1940)の時期の圧倒的な多さであり、それ以前の時期に比べての激増ぶりである。日の丸を歌いこんだ軍歌は、この(vi)の時期だけで34楽曲と、日の丸を歌いこんだ全軍歌71楽曲中の47.9%を占めている。また、その34楽曲というのは、同時期の全軍歌121楽曲の28.1%を占める多さである。それに対して、(v)の満州事変～(1931-1936)の時期の(E)の値は12.0%であり、大きな違いがあると言える。

(イ) さらに(vi)の時期には、「日章旗の下に」(1938)、「日の丸行進曲」(1938)、「日の丸子守歌」(1939)と、日の丸を楽曲の題名にすえたものが3曲も現れる。他の時期にはない特徴である。

(ウ) 歴史学や歴史実践の世界では、(v) + (vi) + (vii)の3つの時期を合わせて「15年戦争」の時期と呼ぶことが多いのだが、表象としての日の丸、軍歌における日の丸の扱われ方の違いという点で見る限り、上記(ア)で示したように、(E)の数値が、(v)の時期は12.0%であるのに対して(vi)の時期は28.1%であり、両者の間にはかなり大きな違いがあると言える。そしてこの点は、国民統合や対外戦争、宣伝政策のあり方の違いや変化を予感させるものである。もちろん、この小さな事実の発見をもって、直ちに「十五年戦争史観」などの妥当性を問うような議論に結びつけるのは早計だと言えようが、この点については今後さらに考察を深めていきたいと考えている。

(エ) (iii)の日露戦争～(1904-1913)の時期については、この時期の全軍歌数が25楽曲、そのうち日の丸が歌いこまれた楽曲数が6楽曲ということで、数こそ少ないが(E)の数値は24.0%である。日露戦争の前後が明治期の中で一番国家意識の高揚が見られた時期であるという通説と符合しているようにも考えられるが、この点の考察については今後の課題としたい。

(オ) (vii)の太平洋戦争の時期については、同時期の全軍歌数が114楽曲、そのうち日の丸が歌いこまれた楽曲数が18楽曲で、いずれも(i)～(vii)の7つの時期の中で(vi)の時期に次いで2番目に多い数字である。しかし(vii)の時期の(E)の値は15.8%で、その前の(vi)の時期に比べると12.3%低下している。これはなぜなのか。絵画や演劇といった他の芸術分野でも同様の傾向がみられるのだろうか。これらの点についても、今後の課題としておきたい。

おわりに

では最後に、「はじめに」で示した、日の丸は、「戦前期日本において、いつから国民の愛国心を高め戦意を高揚するための表象の1つとして積極的に使われ出したのだろうか」という問いに改めて答えておくことにしよう。

今回は、堀内敬三と長田暁二の長年の研究成果に全面的に依拠する形となったが、その研究成果を基

にした本稿での分析によるならば、軍歌というジャンルを通して見る限り、日の丸が国民の愛国心を高め戦意を高揚するための表象の1つとして積極的に使われるようになるのは、(vi)の日中全面戦争～(1937-1940)の時期からだと言えるだろう。

別の言い方をすれば、その時に、表象としての日の丸のあり方は大きく変化し、それが戦後の日の丸をめぐる激しい論争にもつながっていくと考えられるのである。

参考文献

〈日本語文献〉

- 赤澤史朗「第6章 宣伝と娯楽」同『近代日本の思想動員と宗教統制』校倉書房、1985年。
- 赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム—戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社、1993年。
- 安西茂喜編『日本軍歌大全集』アンカー興業、1980年。
- 池田忍・小林緑編『ジェンダー史叢書 第4巻 視覚表象と音楽』明石書店、2010年。
- 伊本俊二『国旗日の丸』中央公論新社（中公文庫）、1999年。
- 長田暁二『日本軍歌全集』音楽之友社、1976年。
- 長田暁二『戦争が遺した歌—歌が明かす戦争の背景』全音楽譜出版社、2015年。
- 加太こうじ『軍歌と日本人』徳間書店、1965年。
- 貴志俊彦『帝国日本のプロパガンダ—「戦争熱」を煽った宣伝と報道』中央公論新社（中公新書）、2022年。
- 貴志俊彦・川島真・孫安石編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、2015年。
- 岸辺成雄編『音楽大事典 第2巻』平凡社、1982年。
- 小村公次『徹底検証 日本の軍歌—戦争の時代と音楽』学習の友社、2011年。
- 繁下和雄監修『新聞集成 日の丸・君が代』大空社、1989年。
- 園部三郎『日本民衆歌謡史考』朝日新聞社、1962年。
- 辻田真佐憲『世界軍歌全集』社会評論社、2011年。
- 辻田真佐憲『日本の軍歌—国民的音楽の歴史』幻冬舎（幻冬舎新書）、2014年。
- 徳丸吉彦・平野健次「表象としての音楽」蒲生郷昭・柴田南雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道萬里雄編『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 第6巻 表象としての音楽』岩波書店、1988年。
- 戸坂潤『日本イデオロギー論』岩波書店（岩波文庫）、1977年。
- 戸ノ下達也『越境する近代5 音楽を動員せよ—統制と娯楽の十五年戦争』青弓社、2008年。
- 戸ノ下達也・長木誠司編『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』青弓社、2008年。
- 呑海沙織編『戦争と文化—附・明治期出版軍歌目録』桂書房、2012年。
- 半澤朝彦編『政治と音楽』晃洋書房、2022年。
- 吹浦忠正『知っておきたい「日の丸」の話—国旗の常識・日本と世界』学研パブリッシング（学研新書）、2010年。
- 堀雅昭『戦争歌が映す近代』葦書房、2001年。
- 堀内敬三『童謡唱歌名曲全集続編1 明治回顧 軍歌唱歌名曲選』京文社、1932年。
- 堀内敬三『日本の軍歌』日本音楽雑誌株式会社、1944年。

戦前日本の愛国・戦意高揚と表象としての日の丸
—軍歌の分析を手掛かりにして—

堀内敬三『定本 日本の軍歌』実業之日本社、1969年。

松田行正『戦争とデザイン』左右社、2022年。

八卷明彦編『軍歌と戦時歌謡集』新興楽譜出版社、1972年。

〈URL〉

平凡社のサイト上の「この本の内容」という岸辺成雄編『音楽大事典 第2巻』平凡社、1982年を紹介する記事。(https://www.heibonsha.co.jp/book/b157347.html 2023.2.14 最終閲覧。)

『JapanKnowledge Lib』所載『日本近代文学大事典』の「堀内敬三」の項目。

(https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=522101000004171 2023.2.14 最終閲覧。)